

雲仙市文化財調査報告書（概報） 第4集

tsukuda

佃 遺 跡

—神代地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—

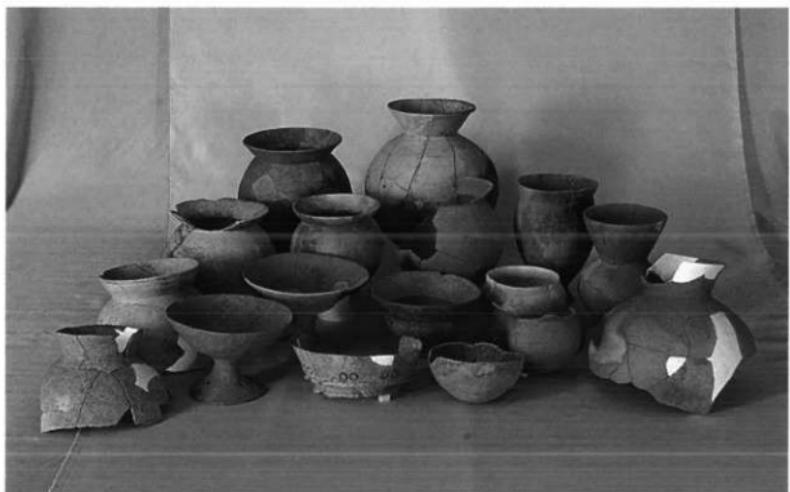
2008

長崎県雲仙市教育委員会

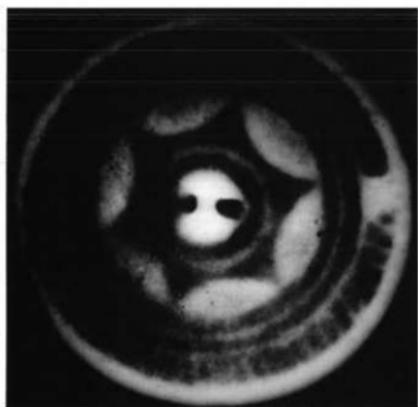




遺跡上空写真（圃場整備事業の進行する個遺跡・平成9年）



佃遺跡出土の古墳時代初頭土器



弥生時代竪穴住居（本文9頁）出土の小型仿製鏡（内行花文）X線写真（实物大）  
(撮影協力：長崎大学医学部・歯学部付属病院 CR)

## 発行にあたって

このたび平成8年度～平成10年度に実施しました、神代地区圃場整備事業に伴う佃遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発行することになりました。

佃遺跡の所在する雲仙市国見町は、島原半島の北端に位置し、これまでにも多くの遺跡が発見されています。今回報告する佃遺跡からは、旧石器時代から近世に至るまでの多種多様な遺物・遺構が発見されました。特に弥生時代の環濠集落は圧巻で、2重の環濠や最大で径14mを超える竪穴住居、径1.3mの柱穴の掘り方をもつ掘立柱建物、高さ1mを超す甕を使用した甕棺墓群、旧河川沿いに100基以上検出されたウッドサークルなど、弥生時代の集落跡がそのまま地中に保存されていた様子が伺えます。当時の有明海沿岸には同様な環濠集落がいくつも存在していたことが各地の調査で明らかとなってきております。それらのクニグニと有明海を通じて交流があったであろうことは想像に容易いことです。また、豪族居館や前方後円墳が発見されている、同市龍王遺跡（2006・2007・2008雲仙市教委）は遺跡東側を流れる倉地川の対岸であります。弥生時代から古墳時代にかけての拠点的集落の変遷が捉えられる貴重な遺跡群として、当地域の歴史的位置付けがますます重要となることは間違ひありません。佃遺跡は15,000m<sup>2</sup>の範囲を全面発掘調査いたしましたが、それは遺跡のほんの一部でしかありません。圃場整備事業において、調査範囲以外は盛土による保存措置を講じて頂いており、遺跡のほとんどはこれまでどおり地下深くに眠り続けることになります。圃場整備事業はすでに完了し今後大規模な発掘調査の予定はありません。遺跡全体の様相を推し量ることは難しいですが、今と同様背後に雲仙岳を望み、前面には豊饒の海である有明海を眺める私たちの祖先の姿が目に浮かびます。

今回の報告書は、遺跡全体の様相を大まかに報告するもので、各時代の遺構・遺物の詳細はまだまだ不明な部分が多くございます。今後も出土資料の整理を進め、改めて詳細な報告を行うことを念頭に置きながら貴重な文化遺産の保護に努めてまいりたいと考えております。

雲仙市の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。本市では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本市にとりまして今報告は、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げ発行のことばといたします。

平成20年3月31日

雲仙市教育委員会

教育長 鈴山勝利

## 例　　言

1 本報告は平成7年度～平成10年度に実施した神代地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する佃遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2 調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

1996年2月5日～1998年11月1日 佃遺跡1区～90区

3 調査体制は次のとおりである。

調査指導	別府大学	名　　誉　教　授	賀川　光夫
	名古屋大学	名　　誉　教　授	渡辺　誠
調査主体	国見町教育委員会	教　　育　長	阿比留　亨
		教　　育　次　長	松本　安央
調査担当	同	教　　育　次　長	松本　安央
		社会教育係	辻田　直人
		文化財調査員	松崎由紀子
調査協力		長崎県教育庁文化課（現学芸文化課）	
現体制	雲仙市教育委員会	教　　育　長	鈴山　勝利
		教　　育　次　長	辻　政実
		生涯学習課長	和田　実
		文化財班班長	柴崎　孝光
		主　　査	江崎　亮太
		主　　査	辻田　直人
		文化財調査員	山下　美郷・小野　綾夏・益田　豊明

4 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・東　文子・林　繁美・寺中典子・村子香織・鍬塚秀樹・松崎・辻田が行い、遺物の実測は早稲田一美・濱本秀美・村子香織・竹中哲朗（現長崎県諫早市）、辻田・小野が、トレースは早稲田一美が行った。また、図版の編集・作成は早稲田・辻田・小野が行い、写真は現地調査を松崎・辻田が、遺物写真は早稲田・辻田・小野が行った。

裏表紙及びAbstractの英訳については、生涯学習課 吉田奈央による。

5 遺物実測については古門雅高氏（長崎県学芸文化課）に協力いただいた。

6 遺構実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7 空中写真撮影業務は㈲文化財環境整備研究所（現㈱九州文化財研究所）に委託した。

8 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

9 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は旧日本測地系による。

10 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。賀川光夫（別府大学名誉教授）、渡辺　誠（名古屋大学文学部名誉教授）、木本雅康（長崎外国語大学教授）、長岡信治（長崎大学教育学部准教授）、古門雅高（長崎県学芸文化課）、渡邊康行（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、上野淳也（別府大学）、塙塚浩一（平戸市教育委員会）、荒木伸也（南島原市教育委員会）、東　貴之（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、長崎県教育委員会（順不同）

11 本書の編集は辻田による。

# 目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 ..... 1 p

第1節 発掘調査にいたる経緯

第2節 発掘調査の方法及び経過

第3節 遺跡の地理的・地形的環境

第4節 基本土層

第2章 弥生時代 ..... 6 p

第1節 住居跡及び掘立柱建物

第2節 環濠

第3節 ウッドサークル

第3章 古墳時代 ..... 12 p

第1節 古式土師器

第4章 中世 ..... 21 p

第1節 龍泉窯系青磁碗

第5章 総括 ..... 22 p

第1節 まとめ

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)	第11図 84区 SK-1 一括遺物 (1/3) .....13
第2図 調査区配置図 (1/10,000) .....2	第12図 古墳時代初頭住居跡土器出土状況
第3図 造構検出状況 (1/2,500) .....4	(86区(2)SB-1) (1/50) .....15
第4図 大型掘立柱建物と竪穴住居 (1/400) .....7	第13図 86区(2)SB-1 出土遺物 (1/3) .....16
第5図 大型掘立柱建物 (1/200) .....7	第14図 古墳時代初頭住居跡土器出土状況
第6図 大型竪穴住居 (1/100) .....9	(86区 SB-1) (1/50) .....17
第7図 大型竪穴住居出土豪棺 (1/20) .....10	第15図 86区 SB-1 出土遺物 (1/3) .....18
第8図 環濠 (1/100) .....10	第16図 旧河川跡 (6区~11区) 及び19区 SK -1 出土遺物 (1/3) .....19
第9図 ウッドサークル (1/100) .....11	第17図 中世溝検出青磁碗 (1/3) .....21
第10図 古墳時代初頭土器一括出土状況 (84区 SK-1) (1/50) .....12	

## 表 目 次

第1表 個遺跡出土遺物観察表.....23
-----------------------

## 図版目次

卷頭図版① 遺跡上空写真（圃場整備事業の進行する佃遺跡・平成9年）

卷頭図版② 佃遺跡出土の古墳時代初頭土器

弥生時代竪穴住居（本文9頁）出土の小型仿製鏡（内行花文）X線写真（実物大）  
(撮影協力：長崎大学医学部・歯学部付属病院CR)

6頁

大型掘立柱建物と竪穴住居（77区～81区）

図版1

77区～81区竪穴住居（柱穴）

77区～81区竪穴住居（柱穴）拡大

8頁

大型竪穴住居と環濠（82区～90区）

72区～76区竪穴住居（柱穴）拡大

40区～68区古代掘立柱建物群

9頁

大型竪穴住居

1区～5区中世大溝

10頁

環濠完掘状況

図版2

大型竪穴住居発掘風景

大型竪穴住居検出状況

77区～81区弥生竪穴住居検出状況（人は柱の位置）

11頁

ウッドサークル検出状況

8区ウッドサークル検出状況

ウッドサークル完掘状況

8区ウッドサークル検出状況

8区ウッドサークル杭痕

34区ウッドサークル内遺物検出状況

14頁

84区 SK-1 検出状況

34区ウッドサークル検出状況

84区 SK-1一括出土の状況

図版3

18頁

86区 SB-1 検出状況

大型掘立柱建物柱痕跡検出状況

調査風景（後ろは普賢岳）

20頁

7区旧河川遺物検出状況①

壺棺検出状況

7区旧河川遺物検出状況②

工事による壺棺の発見

8区旧河川遺物検出状況（第16図15、19頁）

86区(2)SB-1 検出状況

中世大溝実測風景

調査風景

21頁

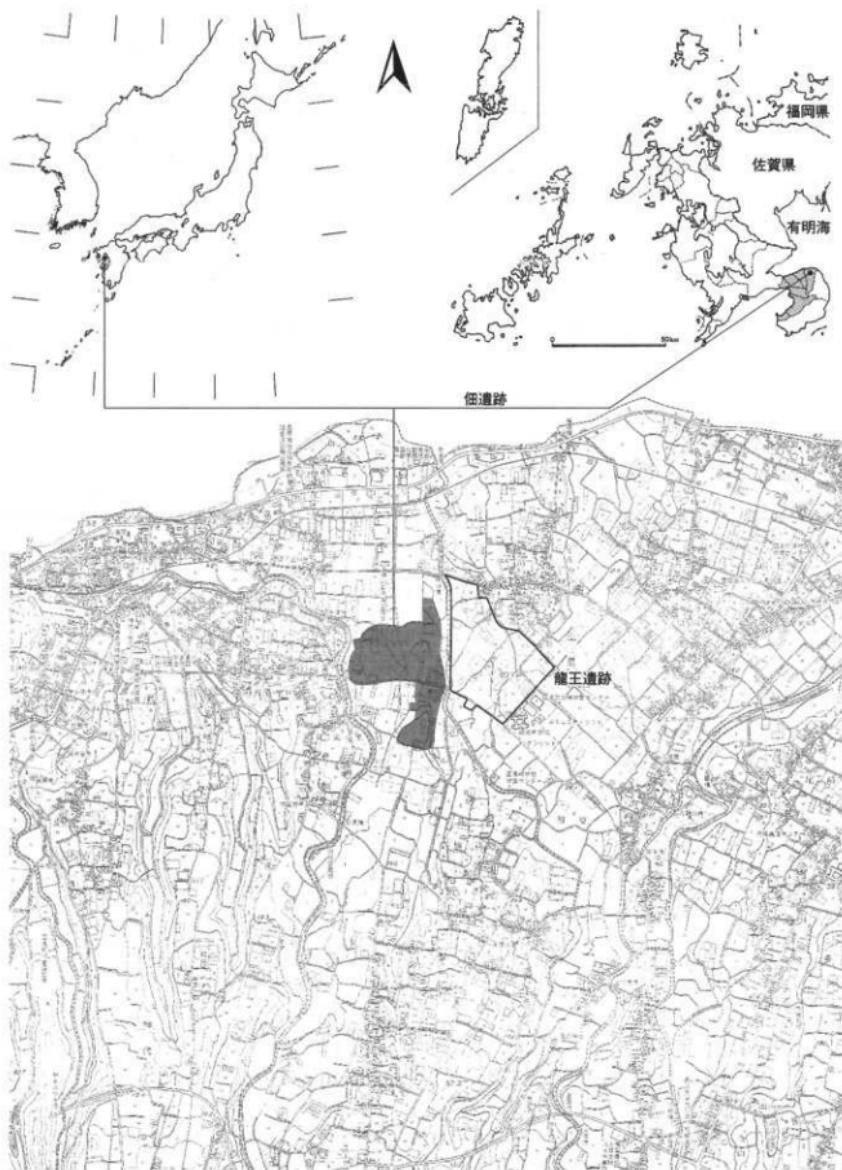
中世溝検出状況

図版4

青磁碗検出状況

出土遺物

溝底面での検出状況



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

平成5年度に長崎県島原振興局より、神代地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、国見町教育委員会が主体となり平成6年度及び平成7年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、赤城遺跡<sup>あかぎ</sup>が新たに発見され、個遺跡の範囲が大きく拡大することとなった。調査の結果をもとに、島原振興局・国見町産業振興課・神代地区土地改良区・長崎県教育庁文化課（現学芸文化課）、国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）による協議の結果、設計変更により大部分は盛土により保存を行うこととなったが、遺跡の消滅する部分について全面発掘調査を実施することとなった。本調査は平成7年度より順次行い、平成10年度において全ての調査区の調査が完了した。今概報では個遺跡で検出された遺物・遺構の一部を報告する。なお、発掘調査は長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。

## 第2節 発掘調査の方法及び経過（第1・2図）

本調査は旧日本測地系を使用し、調査対象範囲（農道・排水路建設及び圃場造成のために遺跡の消滅する範囲）を20mメッシュに区切り、1区から90区に区分して順次調査を実施した。しかしながら、調査区の立地条件などにより、必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない。今報告書における報告は調査全体の状況を報告するものであり、個々の遺物・遺構や各時代の詳しい説明は今後の本報告時にを行うものとする。

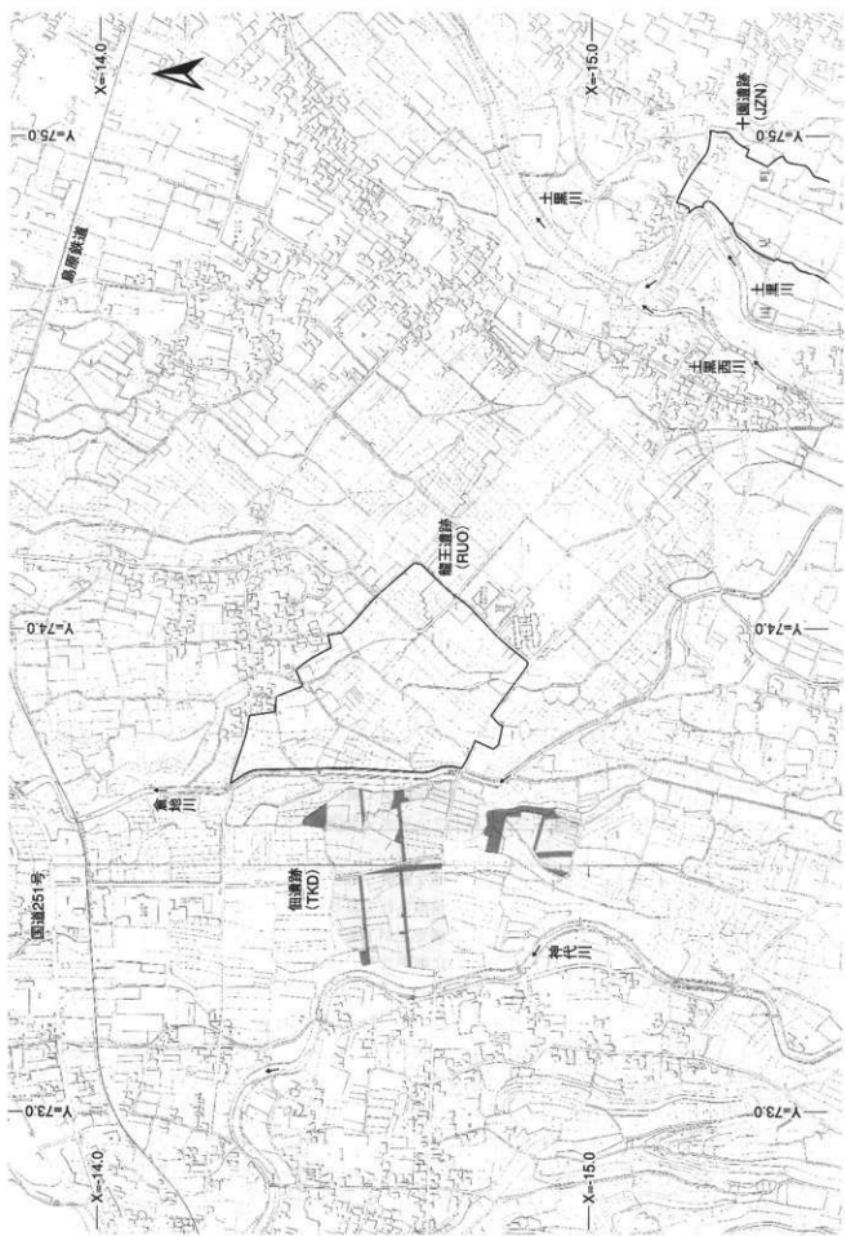
佃遺跡は平成5年度に農業用ビニールハウス（苺栽培）建設に伴って新規発見された遺跡である。佃遺跡は概ね水田として利用されているが、これまでにも数度の造成工事が実施されており、表土を除去すると遺物包含層がまったく存在せず基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出する部分も少なくない。調査では重機により表土を除去した後、遺構確認面または遺物包含層上面まで再度重機により掘削を行っている。その後の掘削作業は概ね人力による。

遺構については、基本的には1/20の縮尺で手実測によるものである。ただし、遺構密度の薄い部分や逆に濃い部分については平板実測や1/10の縮尺による実測など、状況に合わせた記録を心がけた。

遺物については、包含層遺物は一括で取上げ、住居跡など遺構に関わるものについては可能な限り実測し取上げた。また、一部の遺物についてはドットマップを作成している部分もある。以下調査の概要を述べる。

佃遺跡からは旧石器時代～近世までの多種・多様な遺構・遺物が検出されている。旧石器時代や縄文時代早期の遺物は他時期の遺物と混在する形で検出されており、今回の調査区以外の部分に包含層が残されている可能性がある。縄文時代晩期では埋カメが1基検出されている。弥生時代の遺構検出面の直下に検出されており、弥生時代以降の遺跡に削平されている部分も多くあるのであろうが、近隣に良好な晩期遺跡が存在することは間違いないであろう。弥生時代～古墳時代初頭にかけては多くの遺物・遺構が検出されている。弥生時代では中期後半～後期前半にかけての環濠集落が検出されている。2重に巡る環濠や径10mを超える大型の竪穴住居が検出されている。また、甕棺墓群も検出されており、弥生時代の集落構造を考える上で貴重な資料となる。古墳時代初頭でも住居跡や廐塗土坑から古式土師器の一括資料が検出されており、当該期の土器編年で大きく寄与するものと考えられる。そのほかにも、9世紀～10世紀頃と考えられる掘立柱建物群や中世の大型の堀（幅5m、深さ2.5m）、龍泉窯系青磁碗の完形品など数多くの発見がなされており、佃遺跡は各時代において地域の中心的役割を果たしていたと考えられる。

第2図 調査区配置図 (1/10,000)

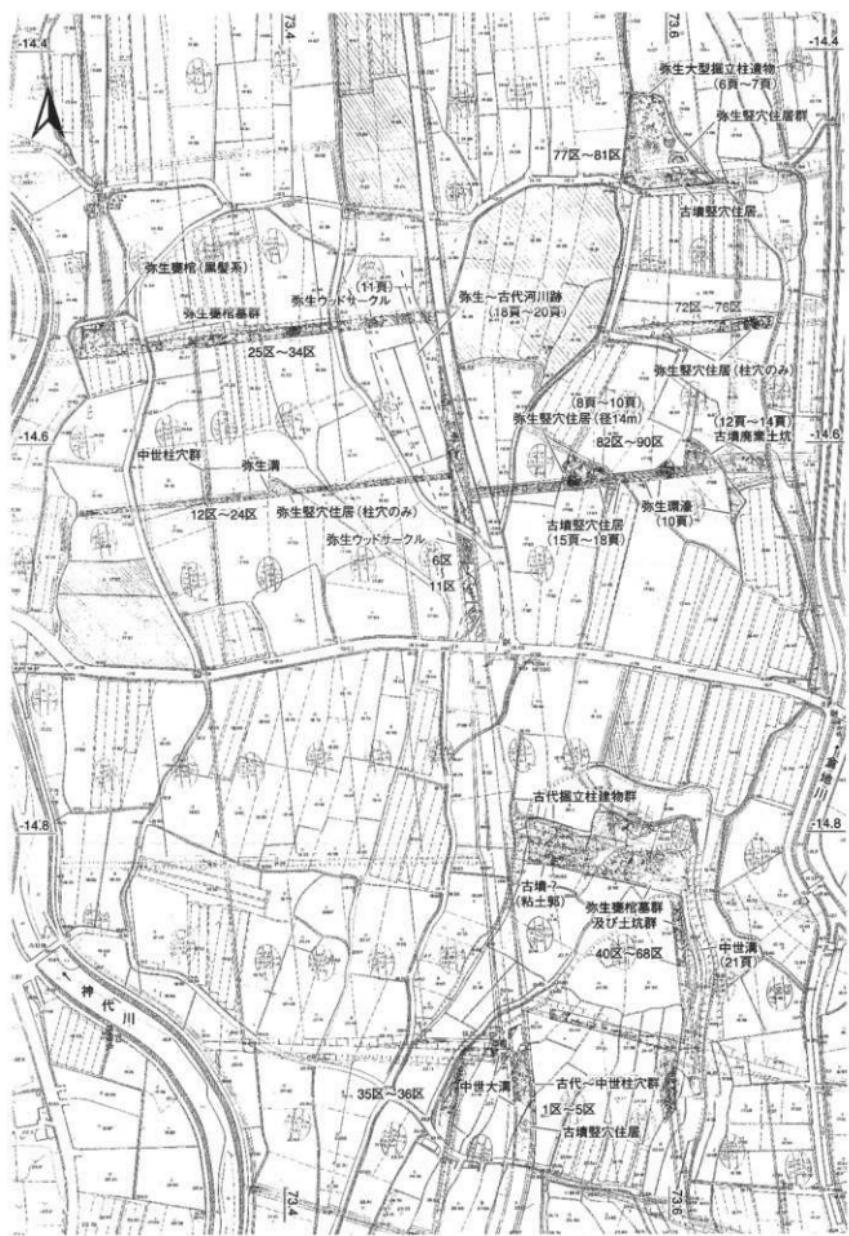


### 第3節 遺跡の地理的・地形的環境（第1・2・3図）

佃遺跡は島原半島の最北端、雲仙岳より伸びる細長い丘陵の先端部分からその先に広がる平野部に位置する。標高は15m～20mで、500mほど北には有明海が広がる。半島内でも最大規模の平野部であり、古代条里的地割を良く残し、現在でもそのほとんどが水田として利用されている。丘陵先端部分からは甕棺墓群や中世堀跡などが検出され、平野部では環濠集落や古代掘立柱建物群などが検出されており、時代や場所によって場の利用の変化が見られる。遺跡の西側には神代川、東側には倉地川が流れ、遺跡の地形断面は扁平な蒲鉾型を呈す。神代川から倉地川までは400mほどで、遺跡はその間全域に展開する。特に弥生時代中期後半～後期前半の環濠集落を伴う集落跡は全面に広がっており、遺跡の範囲が最大となる時期である。また、その時期には南側丘陵西縁直下を通り、遺跡中央を縦断するように旧河川が検出されている。河川堆積の最下層からは弥生土器が検出されており、環濠集落の存在する時期には比較的水量のある河川であったことが判る。河川堆積の最上層には古代須恵器が大量に検出されており、弥生時代～古代までは河川として機能していた様子が伺える。神代川の西側は現在集落となっているが、佃遺跡と比べると若干標高が高い。現在水田は無く畠地しか見られないのは当時も同様と考えられる。神代川は倉地川やさらに東側を流れる土黒川に比べると比高差が小さい。このことは先に述べた遺跡中央を縦断する旧河川と密接に関連するのではないか。すなわち、遺跡の最も広域に展開する弥生時代には、神代川とそこから分流した遺跡内を縦断する旧河川の2本の川が流れているのではないだろうか。現在の神代川以西は標高が高く、神代川の氾濫原は最も西側で現在の神代川付近、東側は佃遺跡南側の丘陵が伸びてきているおかげで、遺跡中央までが限界である。調査では現在の神代川に近い調査区で、河川堆積と考えられる礫層の直下から甕棺墓が検出されたり、河川堆積と考えられる土層から多くの弥生土器が検出されている。このことから弥生時代には現在の神代川付近にも河川が流れおり、当時は現在の神代川と遺跡中央の2本の河川が流れていたことが想定される。また、遺跡中央を流れる河川の埋没時期は、古代須恵器の検出から古代と考えられ、このことはこの地が古代条里制の痕跡を残していることからも整合性が高い。佃遺跡を東西に走る道路は古代官道と想定されており、条里制整備の際に河川が現在の神代川1本に集約された可能性もある。佃遺跡の平野部では古墳時代初頭から中世の龍泉窯系青磁碗破片を一括廃棄するピットまでの間の遺構がほとんど見られない。南側丘陵の先端から1段下がった平坦部分（平野部より標高が高い）には9世紀～10世紀頃と考えられる掘立柱建物群が検出されている。また、丘陵上からは龍泉窯系青磁碗完成品の埋設される溝や、遺物の出土がほとんど無く時期が判然としないが、中世ごろと考えられる幅5m、深さ2.5mの逆台形の堀切跡が検出されるなど、平野部ではなく丘陵付近に居住地が動いている。また、倉地川を挟んで対岸の龍王遺跡（辻田・小野2008）では古墳時代の豪族居館や弥生時代終末～古墳時代初頭の集落が検出されており、弥生時代の終末には佃遺跡の集落は衰退し、東側の龍王遺跡へその中心が移っていることが伺える。これらのことから、佃遺跡は弥生時代終末期には居住地ではなく水田などの食糧生産の場に変化しつつあり、その後古代において条里制の整備が行われたと考えられよう。また、中世鎌倉時代になると、平野部にも何かしらの建造物を構築するようになることも調査の結果から見て取れる。このように佃遺跡から検出された多くの遺構・遺物は近隣の遺跡と密接に結びついて推移しており、1つの遺跡としてだけでなく、地域全体の歴史を検証する遺跡として重要な役割を担う。また、1km程東側では肥前国高来郡郡衙関連遺跡である十團遺跡があり、8世紀台の掘立柱建物群が検出されている。佃遺跡周辺では検出されない時代が補完される。

#### 【参考文献】

辻田直人・小野綾夏 2008『龍王遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第3集 長崎県雲仙市教育委員会



第3図 遺構検出状況 (1/2,500)

## 第4節 基本土層

佃遺跡は水田として利用されているため、著しく削平を受けている部分も少なくない。調査においては、ナイフ形石器や押型土器など旧石器時代や縄文時代の遺物も散見されるが、調査を行った範囲内ではそれに相当する包含層の検出には至らなかった。ほとんどの地点で弥生時代及び古墳時代の包含層が薄く残り、その下層はすぐに弥生・古墳の遺構確認面となる。以下、柱状図にしたがって詳細を述べる。

第Ⅰ層：厚さ15cm～20cm程の水田耕作土。

第Ⅱ層：水田耕作土直下に一般的に見られる赤褐色の硬質土層で、厚さ5cm程の水田床土である。

第Ⅱ'層：旧耕作土及び旧水田床土である。場所によっては数層にわたって検出される部分もあり、これまでの水田整備の痕跡を示すものであろう。

第Ⅲ層：やや締まりのある黒色土で、弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。地点によっては削平されてしまっている部分も多い。

第Ⅳ層：AT下位の暗色帶である。地点によっては削平されてしまっている部分も多い。上面が弥生・古墳の遺構検出面となるが、遺構内の埋土も同様な黒色土であり、調査においては第Ⅳ層を除去して初めて遺構が検出される部分も見られた。

第Ⅴ層：AT下位の暗色帶の下位に見られる、黄色の粘質土層である。堆積が厚く数mを超える部分もある。第Ⅴ層が削平されている部分では上面が遺構検出面となり、黄色の検出面に黒色の遺構が明瞭に検出されるため遺構の検出は容易であった。

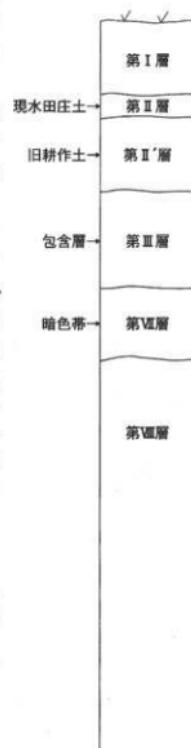
雲仙市国見町周辺の発掘調査では、百花台遺跡群の土層堆積を基本として調査を行っている。それに当たはめると、佃遺跡第Ⅳ層及び第Ⅴ層はいずれも百花台遺跡群の第Ⅶ層・第Ⅷ層に相当し、佃遺跡第Ⅲ層より上層は、百花台遺跡群では存在せず、アカホヤ火山灰を含む第Ⅱ層よりも上位の堆積となる。佃遺跡東側の龍王遺跡では、百花台遺跡第Ⅵ層と同様のAT火山灰を含む硬質の茶褐色土層も検出されており、佃遺跡でも部分的には土層が残存している可能性もある。佃遺跡の広がる平野部は龍王遺跡に比べるとやや低い位置にあたる。遺跡のすぐ両脇には倉地川・神代川が流れる。調査においては遺跡中央部分でも旧河川が検出されているように、龍王遺跡よりも河川の影響を受けやすい立地条件であったと考えられ、土層の発達の妨げとなつたのであろうか。

### 【参考文献】

田川 肇・副島和明・伴耕一郎 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会

田川 肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集 長崎県教育委員会  
辻田直人 2007『龍王遺跡II・真正寺条里跡』雲仙市文化財調査報告書(概報) 第2集 長崎県雲仙市教育委員会

松藤和人編 1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告 第8冊 同志社大学文学部文化学科



## 第2章 弥生時代

### 第1節 住居跡及び掘立柱建物

77区～81区：遺跡の最も北側で、円形の竪穴住居跡群と1間×2間の掘立柱建物が検出されている。竪穴住居は、最も残存状況が良く大型のもので、径10m、立ち上がり20cmほどを確認している。床面には張り床が検出され、円形に巡る柱穴が2列検出されており、建替えが行われたことが想定される。住居跡中央には土坑が検出され、内部からは若干の遺物と炭化物が検出されている。地床炉のような被熱による硬化面などは検出されておらず、炉跡かどうかの確認は困難である。また、柱穴列と住居壁面の間の張り床下には、浅いレンズ状の溝状遺構が柱穴を巡るように検出されている。溝状遺構からの遺物は細片ばかりであるが、比較的人きな磁石片が検出されている。他の住居跡でも床下溝内からの砥石片の検出が見られ、住居構築の際の祭祀的な行為に用いられた可能性もある。

他の住居跡も同様の状況で検出されているが、遺構実測図を見ても判るとおり、壁面の立ち上がりが削平されてしまっているものや、柱穴のみのものも見受けられる。いずれの住居跡も径が8m～10m程に復元されようか。佃遺跡の住居跡で特徴的なことは、いずれも8mを超える比較的大型のものばかりということである。しかしながら、このことは同じ島原半島に所在し、ほぼ時期を同じくする



大型掘立柱建物と竪穴住居（77区～81区）

今福遺跡（町田・宮崎 1986）や十園遺跡（竹中 2005）からも、径10mを越す住居跡が検出されていることを考えると、島原半島地域全体における特徴とも考えられる。また、佃遺跡では竪穴住居内部から炉跡と考えられる痕跡が見つかっていない。十園遺跡の住居跡では地床炉と考えられる焼土が住居中央付近に検出されており、このことは佃遺跡の特徴であろうか。

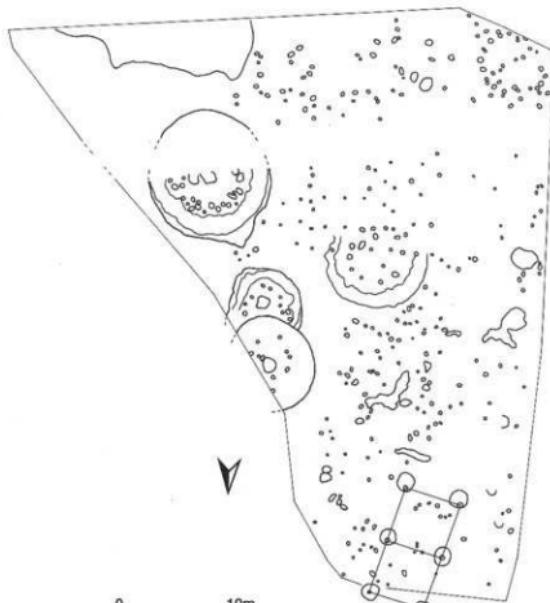
掘立柱建物は竪穴住居跡群から10mほどの距離で検出されている。柱穴内からの遺物の検出が少なく、はっきりとは時期の特定が難しいが、柱穴内部の土層と竪穴住居内部の土層の状況とは酷似しており、ほぼ同時期のものと考えている。建物

の規模は1間×2間で、桁行9m、梁行4.72m。桁行の方向は東に20度傾く。柱穴の大きさは、径1.3m、深さは最深で1m、ほぼ円形で垂直に掘り込まれており、一部の底面には柱の立つ部分のみ10cmほど2段掘りとなっている。柱材は残存していないが、痕跡は明瞭に確認され、柱の径は40cm前後に復元される。北側は調査区外に伸びている可能性も考えて調査を行ったが柱穴は検出できず、6本柱の掘立柱建物と考えてまず間違いない。6本の柱のうち、北西側の3本は掘り方中央に柱痕跡が検出されているが、南東側の3本については掘り方の北側壁面に張り付くように柱が建てられており違いが見られる。当調査区の北側は水田の高さがかなり低くなっている、遺物包含層のみならず遺構についてもその多くが削平されていると考えられる。検出時の深さ1mを測る掘立柱建物でさえ深さ20cm～30cm程の検出である。前頁写真に写る6人の作業員は柱痕跡の位置を示し、その大きさが良くわかる。

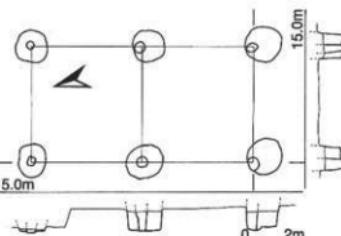
#### 【参考文献】

町田利幸・宮崎貴夫 1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会

竹中哲朗・辻田直人 2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書（概報）第5集 長崎県国見町教育委員会



第4図 大型掘立柱建物と竪穴住居 (1/400)



第5図 大型掘立柱建物 (1/200)

**87区 SB-1**：検出された竪穴住居の中では最も大型のものである。前述した77区～81区の住居跡群から200mほど南側に位置し、近隣には2重の環濠も検出されている。その間の調査区（72区～76区）からも竪穴住居の柱穴と考えられるピット群が検出されており、かなり広範囲に集落が展開していたと考えられる。検出された竪穴住居は長軸約14.5m、短軸約13mを測り、南側に方形に張り出した部分が見られる。平面形状は「帆立貝」型とでも形容できようか。住居の立ち上がりは50cm程が残存している。中央に土坑、円形に巡る柱穴列、張り床、張り床下の溝状造構と、77区～81区で見られた住居群と同様の状況である。柱穴の一部では、張り床上面において柱痕跡部分が2列検出されており、2重の柱列で屋根を支えていたものと考えられる。造構内部の土層からの出土遺物は破片資料ばかりであり、床面直上においても同様である。ただし、床面直上から、小児壺棺・偽製鏡（内行花文鏡）・ほぼ完形に復元できる丹塗りの短頸壺が検出されており、住居を廃棄する際に内部に残されたものと考えられる。特に住居北側の壺棺周辺には、炭化材や焼土などが検出されており、火を使った何かしらの行為が考えられる。検出範囲が限定されており、焼失住居に伴うものとは考えていない。検出した壺棺は住居跡埋没後に埋納されたものとも考え、精査を行ったがそのような痕跡は確認でき

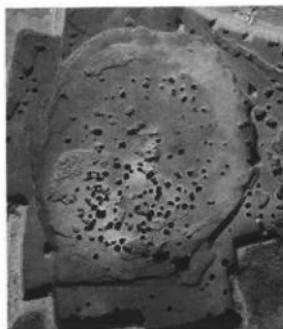


大型竪穴住居と環濠（82区～90区）



第6図 大型竪穴住居 (1/100)

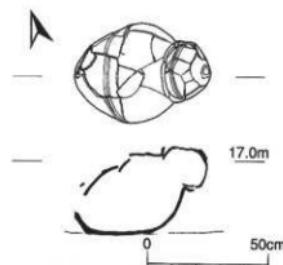
なかつた。次頁の壺棺実測図において、壺棺の接している下面のラインは、住居張り床の直上であり、床の上に「置いた」ように検出されている。住居内部の土層堆積状況も「徐々に埋没していった」ような痕跡は見られず、「一気に埋められた」ようにはほぼ一様な堆積であった。したがって、この住居は廃棄する際、きれいに片付けられ、火を使った何かしらの行為を行い、丹塗りの短頸壺・鏡と共に壺棺を埋納している様子が伺える。一際大きな住居跡であり、鏡の存在や住居廃棄時の特殊な状況から、集落の中でも中心的な人物の住居であろうか。



大型竪穴住居

## 第2節 環濠

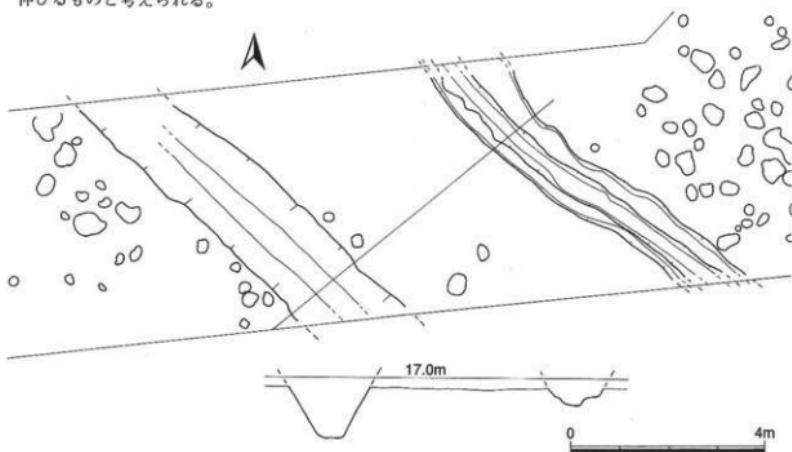
前述した大型竪穴住居跡の東側約20mの地点に検出されている。4m程の間隔をおいて2条の溝状遺構が検出されている。一方は幅1.5m、深さ1mのV字状の溝で、底面は幅50cm程で平らに仕上げられている。もう一方は並行するよう検出され、幅1m、深さ40cm程で、2段掘りのものである。遺構内部の土層はいずれも同じような土質で、2本とも同時期に埋没したのであろうか。出土遺物も弥生時代中期後半～後期前半の土器片が出土しており、これまで紹介してきた住居跡群と同時期に存在していたと考えられる。溝状遺構のすぐ西側で検出された古墳時代初頭の住居跡（後述：17頁）の立ち上がり部分が10cmほどしか検出されていないことを考えると、かなり上部が削平を受けていると考えられる。仮に当時の生活面から50cm削平を受けていたとすると、V時の溝は幅2.3m、深さ1.5m、2段掘りの溝は幅1.7m、深さ0.9mほどに復元されようか。また、遺構周辺には弥生時代～古墳時代にかけての多くの遺構（ピット群）が検出されているが、2本の溝状遺構の間にはほとんど遺構（写真に見られる、溝の間にある礫群は近・現代のかく乱である）が見られない。溝状遺構掘削時の廃土を利用した土壠等が溝状遺構の間にあったことも想定されようか。そうであるならば、弥生期に溝自体は埋没してしまったものの、土壠状の遺構は古墳時代にも残存し、住居などの遺構が構築されなかつたと考えられる。2段掘りの溝については東側に40mほど離れた調査区で検出されており、V字状の溝も同様に伸びるものと考えられる。



第7図 大型竪穴住居出土発掘（1/20）



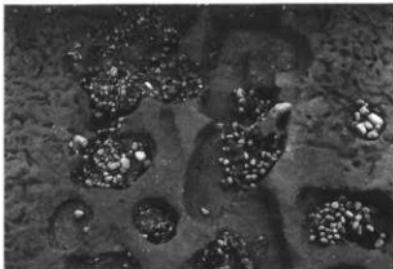
環濠完掘状況



第8図 環濠（1/100）

### 第3節 ウッドサークル

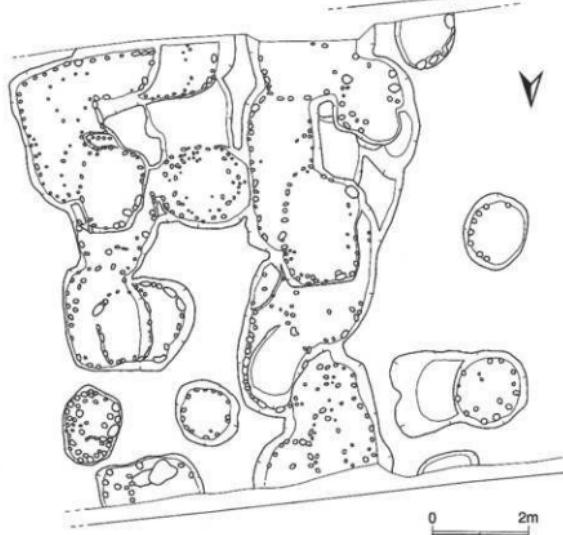
遺跡中央を縦断する旧河川内（8区及び34区）に検出され、その数は100基を超える。かなり切り合い関係が多く、正確な基数を把握することは困難である。また、8区と34区は150mほど離れており、その間にも同様に遺構が続くとすれば、その数は数百基単位と予想される。平面形状は、円形、楕円形、隅丸方形、不定形など様々で、土坑の深さも、立ち上がりの無いものから1m近いものまで確認されている。いずれも径1cm～5cm程の杭痕跡が立ち上がり部分直下に巡る。中にはさらに内側に巡るものも検出されている。杭そのものの木質は残存していないが、遺構の立ち上がりの壁面部分にも杭の痕跡が見られ、上部にまで杭が伸びていたことが予想される。旧河川は砂礫により埋没しており、遺構内部にも砂礫と共に大量の弥生土器が検出されている。これまで紹介した竪穴住居群や環濠と同時期に存在していたものと考えられる。北九州市長野小西田遺跡では同様の遺構内部から木製品の未製品が検出されており、「木製品加工用の水漬け造構」と報告されている。



ウッドサークル検出状況



ウッドサークル完掘状況



第9図 ウッドサークル (1/100)

他の遺跡周辺では木製品などの有機質遺物は残存しないが、遺構の底面に薄く黒色の粘質土が検出されたものもあり、木製品が存在していた可能性もある。ただし、長野小西田遺跡でもすべての遺構が木製品の水漬け造構と考えられているわけではなく、今後慎重な検討が必要である。2007年度の調査では雲仙市伊古遺跡から100基を超える同様の遺構が検出されている。

#### 【参考文献】

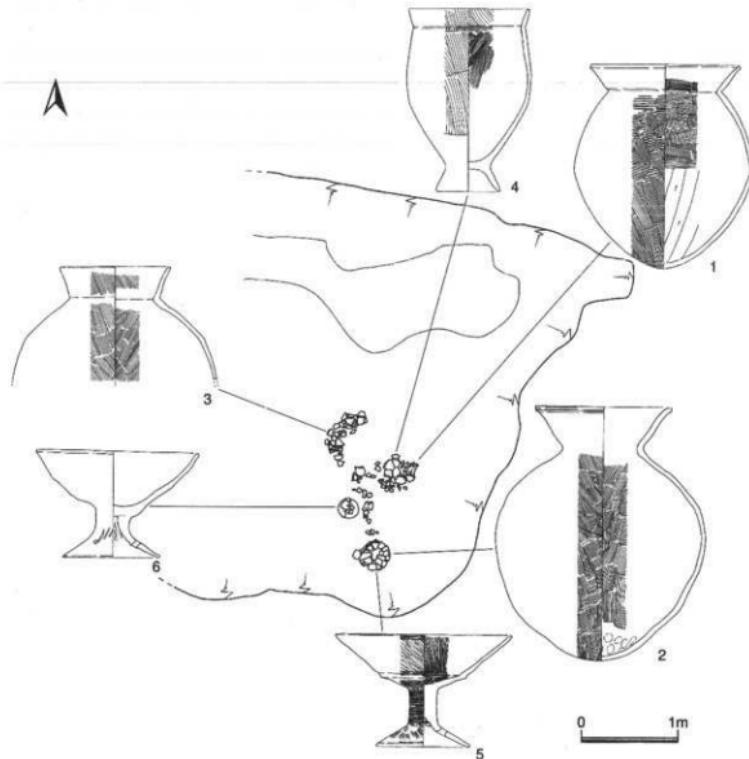
前田義人 2000「長野小西田遺跡の水場の造構」『考古学ジャーナルNo457』ニュー・サイエンス社

## 第3章 古墳時代

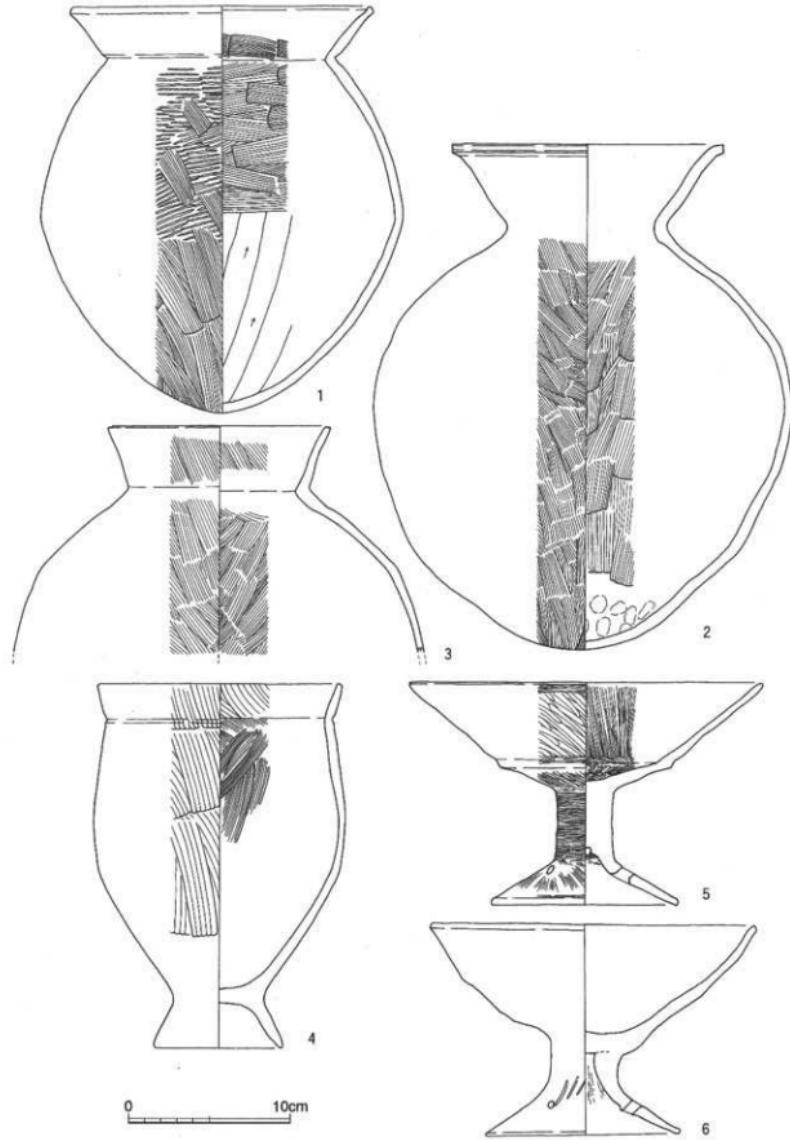
### 第1節 古式土師器

佃遺跡では古墳時代初頭の堅穴住居や廐棄土坑などが検出され、その中からまとまって遺物が出土している。また、遺跡中央に検出された旧河川跡の砂礫堆積物の中にも多くの遺物が検出されている。今章では主に遺構に絡む一括遺物を中心に紹介する。

84区 SK-1：方形を呈する土坑で、当初は住居跡とも考えたが、土坑底面は北側へ緩く傾斜しており、床面や炉跡などの検出は見られなかったため廐棄土坑と考えている。最深部で深さ40cmを測る。土坑内からは多くの土器片が検出されているが、細片ばかりであり、今回図示した遺物とは出土状況が異なる。遺構実測図にも示すとおり、土坑南東隅の1m<sup>2</sup>程の範囲から6点の土器が検出されている。土坑の緩やかな傾斜部分に張り付くように出土しており、いずれの土器もそれぞれの破片が集中して検出されている。また、残存率も50%を超えるものがほとんどである。特に第11図2や6などは廐棄された状況をそのまま表しているような状態で出土しており、原位置に近い検出状況と考えられる。



第10図 古墳時代初頭土器一括出土状況（84区 SK-1）(1/50)



第11図 84区 SK-1 一括遺物 (1/3)



84区 SK-1 検出状況

1は口径18.4cm、器高24.9cm、口縁部より12.5cmの胴部中央付近で胴部最大径22cmを測る庄内系の特徴を示す壺で、残存率は60%ほどである。やや尖り気味の底部から緩やかに立ち上がり、器高の半分の位置で屈曲し内湾に転ずる。口縁部の屈曲部は鋭く尖り、「く」の字に直線的に開いて口唇部はやや外反する。口唇部上端は盛り上り内面に段を1段持つ。外面は、口縁部がナデ、胴部上半部分がタキの後部分的にハケ。胴部下半は下方からのハケである。内面は口縁部から胴部上半は横位のハケ、下半はケズリである。口唇部はへ

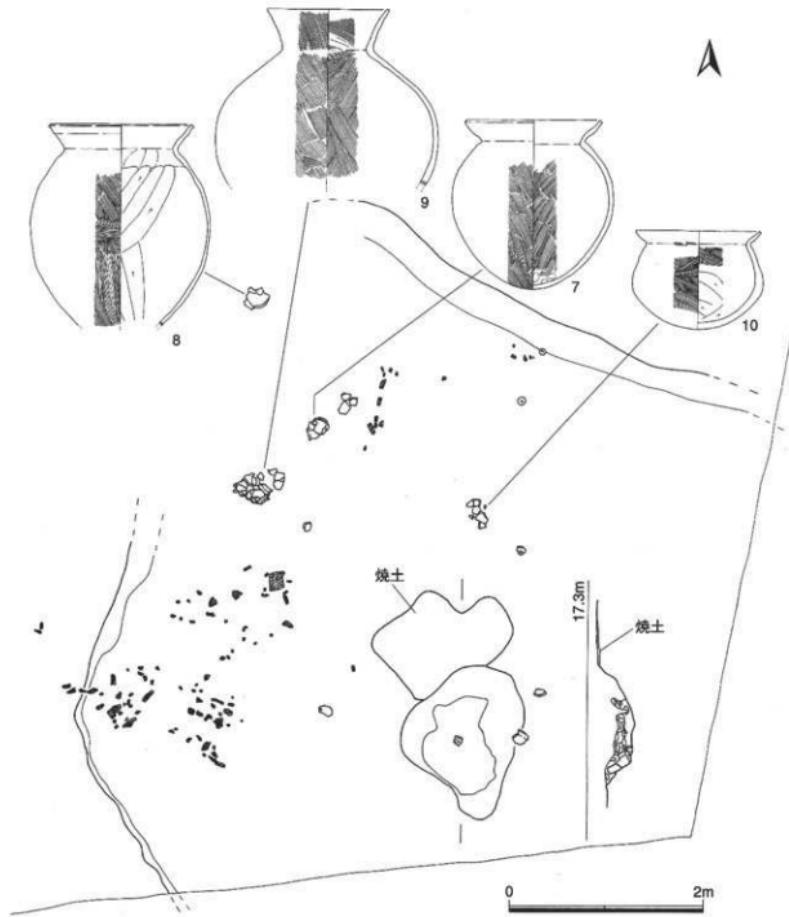
ラ状工具により丁寧に磨かれている。胎土には金糸母が含まれており、他地域からの搬入品と考えられる。2は壺で、口径16.6cm、器高30.8cm、胴部最大径25.6cmを測る。ほぼ完形に復元できる資料である。やや尖り気味の底部から波打ちながら丸く立ち上がり、器高のはば半分ほどで最大径となる。肩は張らず、「く」の字に口縁部に統く。口縁部はやや内湾気味に開く、上半部分で外反し口唇部ではさらに関く。口唇部はヘラ状工具で面取りされており、端部の中央にはくぼみが巡る。内外面ともに継位のハケが施され、内面底部には指頭圧痕も見られる。胎土には角閃石が多く見られ、地元での製作か。3は壺で、口径13.5cmを測り、胴部上半部分から口縁部にかけての資料である。肩は張らず、口縁部は鋭く「く」の字に屈曲しやや外反気味に開く。口唇部端はくぼみが巡る。外面は横位のナデの後斜位のハケを施す。内面は横位のナデの後継位・斜位のハケである。焼成が良かったのか、器壁の残存状況は良好である。4は台付壺で、口径14.8cm、器高22.3cm、底径7.8cm、胴部最大径15.2cmを測る。胴部最大径が口径を上回る。脚台部分は「ハ」の字にまっすぐ開き、端部は丸くおさめる。胴部は脚台との接合部より直線的に開き、器高のはば半分でやや内傾する。口縁部はくびれ部分に段を持ち、直線的に「く」の字に短く開く。口唇部端はヘラ状工具で面取りされている。外面は幅の広い継位のハケで、脚台部分は横位のナデである。内面は口縁部が外面と同じ幅の広いハケで、胴部は不定方向の幅の狭いハケを全面に施した後ナデされている。

胎土には砂粒を多く含む。5は高壺で、60%ほどの残存率である。口径は復元で21.6cm、器高18.6cm、裾部径11.4cmを測る。裾部は直線的にスカート状に開き、孔はほぼ等間隔に3ヶ所穿たれている。脚部は垂直にのびる坏部へ接続する。大きく「ハ」の字に開いた坏底部から段をもち直線的な坏部が開き、口唇部は丸くすぼまる。脚柱部分及び坏底部外面は研磨痕が顕著に見られるが、それ以外は、実測図には表現しているものの、かなり風化している。裾部内面は丁寧な横位のナデであるが、部分的に布目圧痕が残る。胎土はよく精製されており、砂粒や角閃石を含む。6も高壺で、ほぼ完形に復元できる。口径19.9cm、器高17.9cm、裾部径11.8cmを測る。裾部はスカート状に開き、短く直立した脚部に統く。坏部は大きく開き緩やかに波打ちながら内湾気味に広がり、口縁部端で外反する。裾部には3ヶ所の孔が見られるが、そのうちの2ヶ所は、内面まで達していない。全体的に風化が著しく、はつきりとした調整痕跡が判るのは脚部のみである。法量や裾部の孔は5の高壺とほぼ同じで、5を摸倣したもの製作技術が未熟であったのであろうか、細かい部分の表現にシャープさが見られない。

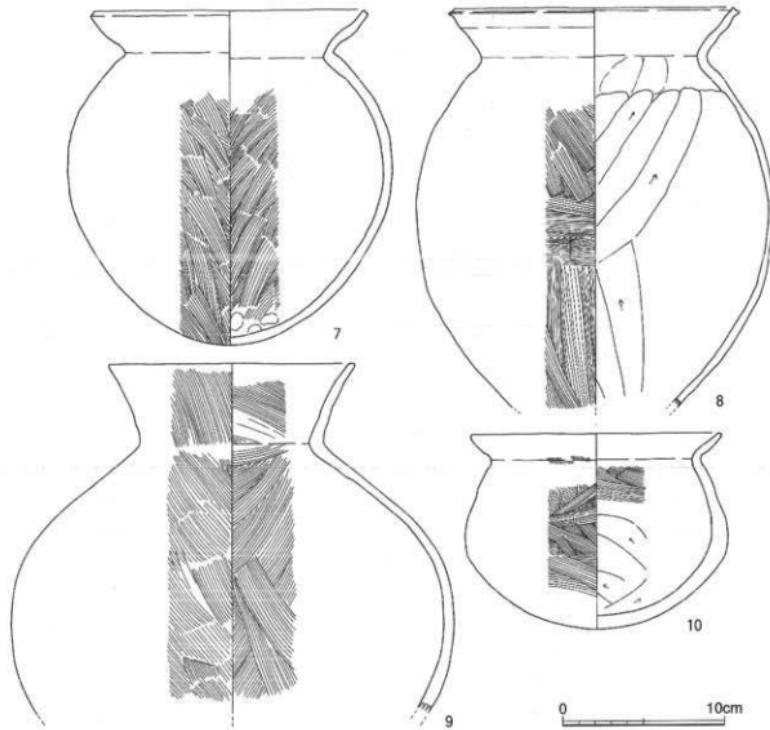


84区 SK-1 一括出土の状況

86区(2)SB-1：後世の遺構が重なったり、一部が調査区外へ広がるため全体の形状は不明であるが、方形に近い形状か。壁面の立ち上がりは30cmほどが検出されており、床面の硬化面等は検出されていないが、中央部には炉跡と考えられる焼土が検出されている。焼土の南側には土坑が検出され、内部には炭化物・灰・焼土片がモザイク状に検出されており、炉にたまつた不要物の廃棄土坑と考えられる。焼土検出面が床面であろう。柱穴は数基検出されているが、どれが住居に伴うものか特定できなかった。内部から土器片や炭化材が検出されているが、床面と考えられる部分より15cm程上面で検出されている。検出された部分も西側に偏っており、住居使用時の状況を表すものではない。廃絶時に西側から不用物を投げ入れたと考えられる。今回図示した以外の破片は細片ばかりである。



第12図 古墳時代初頭住居跡土器出土状況 (86区(2)SB-1) (1/50)



第13図 86区(2)SB-1 出土遺物 (1/3)

7は壺で残存率70%ほどである。復元口径16.9cm、器高20.6cm、胴部最大径19.8cmを測る。底部は若干尖り気味となるが、胴部はかなり球体に近く、口縁部は鋭く「く」の字に屈曲し内湾する。口唇部端は面取りし、中央には若干くぼみが巡る。外面は底部から放射状にハケを施し、頸部付近から口縁部にかけては丁寧なナデである。内面は底部に指頭圧痕が残り、外面と同様に底部から放射状にハケが施される。頸部付近から口縁部にかけては丁寧なナデである。器壁の残存状態は非常に良好で、また、厚さは全体的に均一で約6mmを測り、手に持つとすりとりと重い。胎土には角閃石を少量含む。

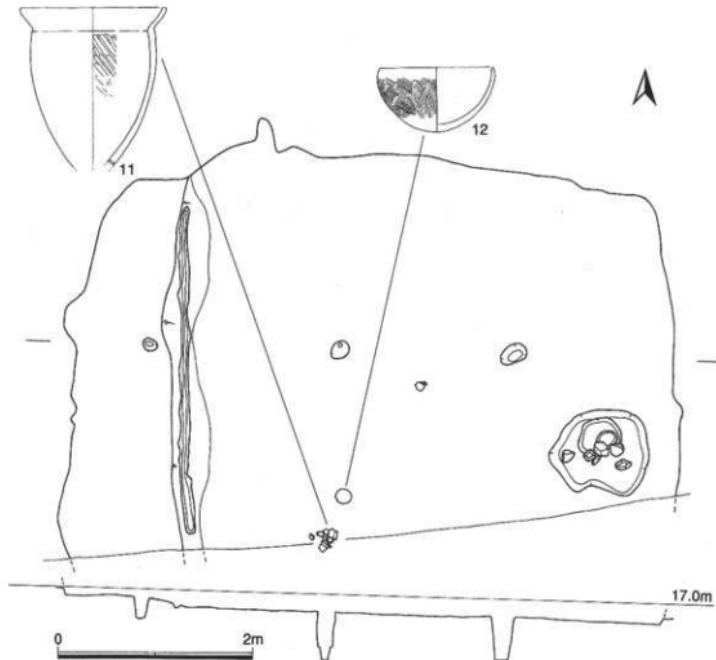
8も壺で残存率は40%である。復元であるが、口径17.8cm、胴部最大径21.9cmを測る。7に比べると縦長の胴部で、あまり肩は張らない。器壁は非常に薄く、内面のケズリが顕著である。口縁部は「く」の字に波打ちながら開き、口唇部は厚みをもち、端部中央はくぼみが巡る。外面は胴部最大径付近に横位のハケを施した後、底部は長いストロークの縦位のハケを施し、上半部には短いストロークの縦位のハケを施す。頸部から口縁部にかけてはナデである。内面のケズリは、下半は底部より放射状に、上半は斜めに施され、器壁の最も薄い部分では2.5mmほどである。胎土には角閃石を多く含む。

9は壺で、いずれも復元で、口径15cm、胴部最大径27cmを測る。丸みを帯びた胴部から口縁部は「く」の字に直線的に開き、口唇部ではさらに開く。内外面ともにハケであるが、器壁はかなり風化している。胎土には角閃石が多く見られる。

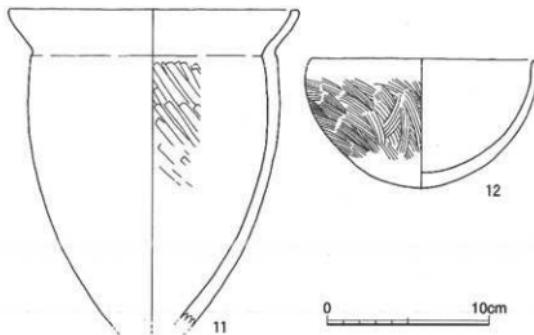
10は鉢で復元口径15.5cm、器高12cm、胴部最大径16cmを測る。底部

は丸くつぶれ気味で、胴部最大径を器高の下半にもつ。肩は張らず、短い口縁部は大きく「く」の字に開き若干内湾する。外面は、胴部下半は目の粗いハケを施し、頸部と底部付近はナデ消されている。口縁部は丁寧なナデである。内面は、口縁部は丁寧なナデ、胴部はケズリの後ナデ消し、頸部直下には横位の強いハケが見られる。胎土には角閃石が多く見られる。器壁は非常に厚みがあり、残存状況も良好である。7と10は胎土や色調、残存状況、厚い器壁など類似する点が多く見られる。また、いずれの土器も胎土に多くの角閃石を含んでおり、在地で製作されたものであろう。

86区 SB-1：方形の住居跡と考えられるが、調査区外にも広がっており全容はわからない。検出された部分で1辺6mを測る。立ち上がりは5~10cmほどしか確認されておらず、床面が辛うじて残存していた。床面には張り床等は見られず、基盤層であるしまりの良い黄色土をそのまま床面としている。平面形状は方形もしくは長方形と考えられ、住居に伴う柱穴と考えられるピットが3基検出されている。いずれも垂直に掘削され、間隔は1.8~1.9mを測る。住居の形状に沿うように直線的に並ぶものの、最も西側のものはサイズも小さくやや浅いものである。住居の西側約1/4は10cmほど床が高くベッド状になっている。また、ベッド状の部分との境界には深い溝が検出されており、内部構造でも何らかの「仕切り」的なものがあったことが予想される。柱の痕跡も規模が小さいことから、柱は主屋根の支柱とは考えにくく、ベッド状の部分は住居外側に突き出たような形状が想像されよう。柱穴のほかには住居東壁付近に径1m程の土坑が検出されている。調査範囲内では炉跡と考えられる焼土等は検出できなかった。次頁写真では図示した以外にもピット状の遺構が見られるが、後世のもの



第14図 古墳時代初頭住居跡土器出土状況（86区 SB-1）(1/50)



第15図 86区 SB-1 出土遺物 (1/3)

欠く資料で、胴部の張りは少なくスリムな形状でやや内湾ぎみに立ち上がる。胴部上半に胴部最大径を持ち、口縁部は「く」の字に開きやや内湾する。口唇部は内面に若干張り出すような形状で、端部は平坦に面取りしてある。全体に風化しており器面調整は見えにくいが、内面は幅の非常に狭い工具でけずられているような痕跡が見られる。器壁は非常に厚く、胎土には角閃石を含む。12は鉢で、ほぼ完形である。底部から胴部は丸く、口縁部付近で若干内湾する。口唇部は丸くおさめられている。外面は底部からの放射状のハケが見られ、口縁部付近は横位のナデにより消されている。また、底部は使用によるものか器面が剥落しており、調整等は不明である。内面は丁寧にナデられている。外面の一部や内面の底部には赤色塗布の痕跡が見られ、当初は全面に塗布されていたものと考えられる。胎土には角閃石を多く含み、在地で製作されたものであろう。

**旧河川跡及び19区 SK-1**：次頁の遺物は遺跡中央を流れる旧河川跡から検出されたものである。

前述しているが、旧河川跡の最下層からは弥生時代の土器片がまとめて検出されているが、完全に埋没するのは古代になってからで、古墳時代初頭の土器片も多く含まれている。20頁の写真でも判るとおり、最下層よりやや上位にかけての砂礫層の中に多くの遺物を検出している。第16図17以外は破片資料であるが、残存率は50%を超えるものばかりで、13のみが口縁部のみの資料である。比較的大き目の破片が多くまた、砂礫の中には人頭大のものも含まれており、大雨時の土石流などで一気に堆積したことが予想される。ここでは、古墳時代の遺物でも特徴的なものを選んで紹介する。したがって、これまでの住居跡や廃棄土坑などと違い、土器の時期的な齊一性は検出の状況からは確認できない。

13は二重口縁壺の頸部から口縁部にかけての資料である。口径は21cmを測る。頸部の最もくびれた部分の外面には突帯が巡り、帯状の文様が施文される。1次口縁は直線的に大きく開き、端部が斜め下方向に鋭角に処理されている。それに続く2次口縁はほぼ直線的に開き、端部は面取りされている。2次口縁の外面には竹管による施文がみられ、2個一对で施文され、残存部分には6ヶ所見られるた

である。

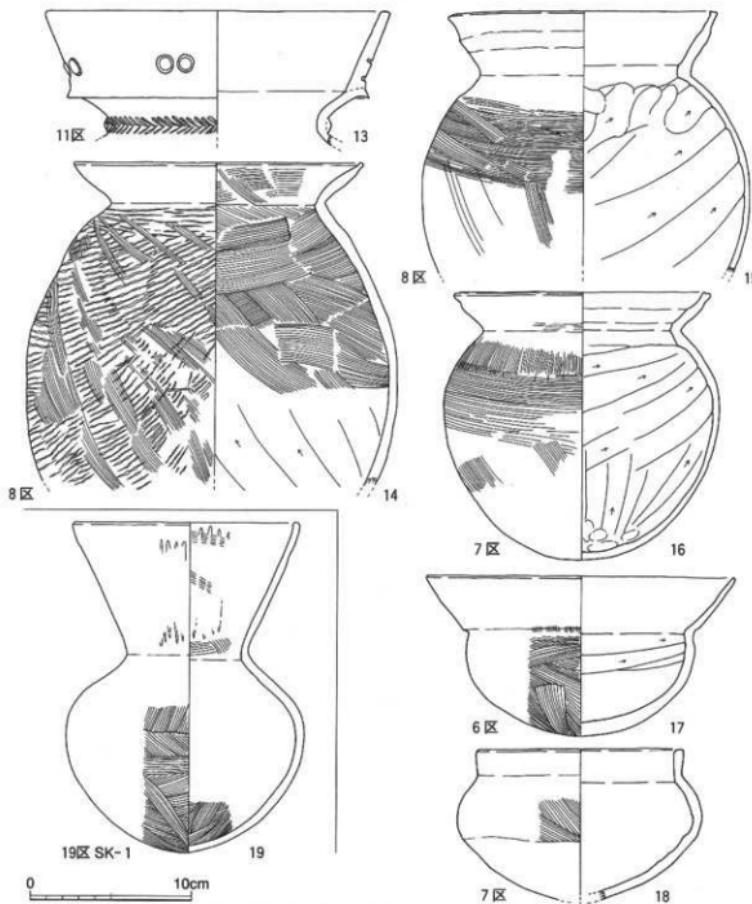
遺物の検出はほとんど見られず、住居中央と考えられる部分に2点と、覆土中に細片が検出されている。第15図12は床面に伏せられた状態で検出されており、住居廃棄時に意図的に残されたものと考えられる。同11もまとまって検出されており、すぐ南側の調査区外に残りの破片があることも考えられる。

11は台付甕で、復元口径17.8cm、同じく復元胴部最大径15.8cmを測る。脚台部分を



86区 SB-1 検出状況

め、作製当初は8分割し、8ヶ所（8対）に施文されていたと考えられる。器面はかなり風化しているが、内外面ともにナデによる調整である。胎土には多くの角閃石を含んでおり、在地での作製と考えられる。14は壺で、胴部下半から底部を欠く資料である。口径17.6cm、胴部最大径22.6cmを測る。胴部中位に最大径を持ち、緩く内湾しながら頸部へ続く。肩は張らず、寸胴である。頸部はやや締まりながらするどく「く」の字に開き、口縁部は若干外反気味である。口唇部はやや細くくびれ、端部は丸くおさめられている。胴部外面は全面にタタキが見られ、頸部直下は横位のタタキ、その下は左斜め下方向にタタキ縞めを行っている。内面は上位から中位までは横位・斜位のハケを、下半は縦位のケズリを行っている。胎土には砂粒が多く見られるが、角閃石はほとんど見られない。15は胴部下半から底部を欠く資料である。口径16.4cm、胴部最大径は復元で20cmを測る。胴部はかなり丸く、や



第16図 旧河川跡（6区～11区）及び19区SK-1出土遺物（1/3）



7区旧河川遺物検出状況①

cmを測る。胴部はかなり球形に近く、それに続く口縁部は大きく「く」の字に波打ちながら開く。口唇部端の中央にはくぼみが見られる。外面は上半に継位のハケを施した後横位のハケが見られ、下半はナデにより消されている。内面は顕著なケズリが見られ器壁はかなり薄い。底部には指頭圧痕も残る。胎土は緻密で、金雲母を多く含んでおり他地域からの搬入品であろう。

17は小型丸底壺の完成品で、口径18.9cm、器高9.8cm、頸部径13.8cm、胴部最大径14cmを測る。

や肩が張る。口縁部はかなり厚く、「く」の字に直線的に開き、先端は薄く仕上げられている。端部は面取りされており、内側に若干張り出す。胴部外面の上半は横位のハケ、下半は継位のハケで、丁寧に仕上げられている。内面は斜位の丁寧なケズリで、器壁がかなり薄く仕上げれている。口縁部は内外面とも丁寧にナデされている。胎土は砂粒を少々含むものの精製されているようで、金雲母を若干含むため他地域からの搬入品であろう。16は同じく壺で、復元口径15.6cm、器高16.4cm、胴部最大径は復元で16.8



7区旧河川遺物検出状況②



8区旧河川遺物検出状況（第16図15、19頁）

丸い胴部に口縁部は大きく開き若干内済する。頸部は段を持つような形状となり、内側に若干張り出す。胴部外面は不定方向のハケが施され、内面はケズリの後ナデされているが、ケズリはそれほど顕著ではなく、器壁は非常に厚い。口縁部は内外面とも横位のナデで仕上げられているが、内面はナデの前にケズリを行っている。内外面ともに約7mm間隔で継方向の文様らしきものが見られるが図示は行っていない。暗文の可能性もある。胎土は緻密で角閃石を含む。18は短頸の小型丸底壺で残存率は40%程度である。

復元口径12.5cm、残存高9.3cm、胴部最大径は復元で14.8cmを測る。ややつぶれたような胴部に短い口縁部が直立する。外面は口縁部から頸部は横位のナデ、胴部最大径付近には不定形のハケが施される。胴部下半はケズリにより調整されている。口縁部内面は横位のナデ、胴部は継位のケズリの後ナデにより消されている。胎土には角閃石が多く見られる。19は土坑より出土した資料であるが、他の遺物は見られず単体での出土である。直口壺の精製品で、口径13.9cm、器高16.3cm、胴部最大径14.6cmを測る。若干とがり気味の底部であるが胴部は丸く、口縁部は若干波打ちながら開く。口唇部でやや内済する。外面は最大径付近は継位のハケ、下半は横位のハケである。内面はケズリ→ハケ→ナデ消しで、口縁部は内外面とも研磨痕が見られるが風化している。胴部外面には赤色塗布の痕跡も見られる。

## 第4章 中世

### 第1節 龍泉窯系青磁碗

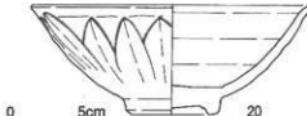
中世の遺物・遺構は主に遺跡南側の丘陵部分から検出されている。第3図や図版3に示すような堀切跡と考えられる大溝や多くの柱穴群が検出されている。ここでは龍泉窯系青磁碗の完形品が検出された溝を紹介する。溝は丘陵の東側縁に総延長120mにわたって検出されている。幅約80cm、深さは50cm程度で、断面形状は逆台形を呈し、丘陵の形状に沿うようにやや蛇行している。下の写真でも判るとおり、丘陵を構成する基盤層には1mを超えるような礫が部分的にみられ、その間を縫うように溝が検出されている。内部の土層



中世溝検出状況

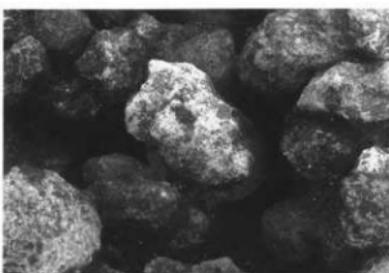
検出されているが、目立った遺物の出土ではなく、5cm四方以下の細片がほとんどである。検出された完形の青磁碗は、このような状況の中では非常に特異な出土状態であり、溝埋設時の祭祀的な儀式に使用されたものと考えられる。

第17図に実測図を示す。口径16.9cm、底径5.7cm、器高6.75cm、高台高1cmを測る。上方からの観察では若干歪な形状を示す。底部は非常に厚く、また、中央部に向かって若干盛り上っている。高台は端部が面取りされており段を有す



第17図 中世溝検出青磁碗 (1/3)

は水流のあつたような痕跡もなく、ほぼ一様で、部分的に拳大の礫により埋められている部分もある。自然に時間をかけて堆積した様子は見られず、一気に埋められたと考えられる。青磁碗の検出された部分はほとんどが拳大の礫によって埋められた部分であり、溝の底に碗を伏せた状態で検出された。覆土は写真でもわかるように、土砂と共に礫が入り込んだような状況ではなく、明らかに礫のみで構成されており、青磁碗を溝の底に埋納し、その周りに丁寧に礫を積んでいったと想定される。溝は120mに渡って



青磁碗検出状況



溝底面での検出状況

る。続く胴部は緩く内湾しながら開き、口唇部は外反する。

外面にはほぼ同じ大きさの錐連弁文が21個描かれ、内面に等間隔で3本の沈線状の施文が見られる。底部と胴部の境には段が見られる。高台内部以外は施釉されており、全体に貫入が著しい。釉の色調はにぶい暗緑色で、外面には砂粒の付着した部分も見られる。同様の青磁碗は松浦市櫻横田遺跡の木棺墓からの出土が知られており、完形の資料としては県内2例目となる。

## 第5章 総括

### 第1節 まとめ

今概報で述べたとおり、佃遺跡からは多種多様な遺物・遺構が検出されているが、今回はその中のほんの一部を紹介したにすぎない。遺跡の中心的な時期である弥生時代については、遺構・遺物の出土量が多く一部の遺構実測図を掲載したに過ぎず、遺物の実測図等を提示するには至らなかった。今後の本報告の中で貴を全うしたい。発掘調査を行った範囲内のほぼすべてから、かなりの密度で遺構・遺物が検出されており、遺跡内に残された考古資料の総量は計り知れないものがある。特に弥生時代は濃密で、二重に巡る環濠や竪穴住居群、大型の掘立柱建物や壇棺墓群、河川跡からの大量の土器や河床に残されたウッドサークル、多くの石包丁など、弥生の環濠集落の様相をよく表しており、大規模な集落が展開していたことは間違いない。ウッドサークルについては検出当初、ドングリピットではないかとの指摘もいただき、内部の土層の水洗選別等も行ったが、果実は検出できなかった。島原半島は有機質遺物がほとんど残存せず、果実が腐食してしまったとも考えられるが、殻斗や花柱にまで注意を払って選別を行ってみたが、検出には至らなかった。「鉢状遺構」などとの類似も考えられるが、これほどの数が検出されている例は見られず、現在の所は第3節で報告のとおりと考えている。佃遺跡に限らず、弥生時代中期以降の島原半島の有明海沿岸には、今福遺跡や景華園遺跡など大規模な遺跡が点在する。市内においても十園遺跡では弥生時代後期の環濠集落が検出されており、多くの遺構・遺物が検出されている。佃遺跡からはわずか2km足らずの距離である。径10mを越える住居跡や二重の環濠・鉄製品など検出され、出土土器の中には対岸の肥後系の物も見られる。これに対して、弥生時代の前半期には遺跡をほとんど見ることが出来ず、後半期における遺跡の展開や急増とは対照的である。今後の本報告の中では他地域との関連なども含めて、島原半島の弥生時代における様相についても考えてみたい。

古墳時代については出土した遺構・遺物について若干の紹介を行った。古墳初頭と考えられる比較的まとまった資料であり、出土状態も一括資料として扱えるものが多い。ほぼ完形に近く器形復元ができるものを抽出して報告しており、遺構内出土の資料についてはまだ点数が増える。近年の調査では、島原半島やその周辺部において多くの当該時期の遺構・遺物が報告（古門1997・1999、大野・松川・松尾2003、竹中2006他）されている。また、佃遺跡の東側に広がる龍王遺跡でも弥生終末～古墳初頭の遺構・遺物が検出され、豪族居館と考えられる方形環濠（辻田・小野2008）から、大量の遺物（二重口縁壺など）が検出されている。弥生時代から継続して大規模な集落が存在することが判る。13頁で報告した一括資料は、庄内系の特徴を残す壺が検出されており、古門氏の編年（古門1999）にあてはめるところⅡ期（布留式古相）と考えられる。また、16頁で報告している住居跡出土の壺については布留式の壺の特徴を示しており、より新しい時期のⅢ期（布留式新相）にあてられようか。龍王遺跡では庄内式並行期の資料も多く検出されており、佃遺跡周辺では、弥生から古墳への移り変わりの様相がよくわかる。

最後に、遺跡の調査が終了して9年以上が経過した。佃遺跡の調査は報告者においては初めての大規模発掘調査であり、右も左もわからずただひたすら現場にて遺構・遺物に向き合っていたことが思い出される。本来は調査終了後数年のうちに報告書の刊行をなすべきであろうが、当時は時間的にもそこまで至らず、非常に反省している。今回は調査内容のごく一部分ではあるが報告することが出来た。本報告へ向けて今後も整理作業を進めたい。また、現地指導を頂いた（故）賀川光夫先生には報告書の完成を見ていただくことは叶わぬこととなった。熱心に指導いただいたあの暑い夏の日が思い出される。

第1表 佃遺跡出土遺物観察表

件名	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
11 古式土師器 庄内水内甕等土器	口縁部付 高身 脚部最大径	18.4 24.9 22	外腹 口縁部:ナメ 内腹:下部:窓縫付部分に斜位ハケ 脚部:下部:窓縫ハケ 口縁部:火候工具による丁寧なきぎ、上腹は盛り上 なり内腹に段を一つもつ 内腹 口縁部から胴部へ平滑ハケ 脚部:脚部付部分に斜位ハケ	砂粒、金雲母 焼成している 外腹:にごい赤褐色(Hue10YR8/3)、一部に手のひら大的黒斑 内腹:口縁部 黑褐色(Hue10YR8/6) 脚部から底部 深灰色(7.5YR4/1)	
12 古式土師器 甕	口縁部付 高身 脚部最大径	16.6 30.8 25.6	外腹 口縁部:ナメ 内腹:下部:丁寧なナメ、火候工具で盛り收り。(くぼみ ハケ) 脚部:ナメ 内腹 口縁部:ナメ 脚部:脚部付	砂粒、角閃石 外腹:口縁部:ナメ(Hue10YR8/4)、口縁部上層 黒色、脇の中部か ら下部へそばけた状の黒斑、底部から脚部中央にかけ て手のひら大的黒斑、 内腹:口縁部:丁寧な火候付付 灰褐色(Hue10YR8/4)、脚 部:脚部付:火候工具による黒斑、黒褐色(Hue10YR8/1)、脚部 はそばけた状の黒斑	上半部の黒度は2次の被熱によ る。その範囲が赤化
13 古式土師器 甕	口縁部付 高身 脚部最大径 (残存部)	13.5 13.8 25	外腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:窓縫付窓縫ハケ 脚部から底部へ不規則な窓縫付窓縫ハケ	砂粒、角閃石 外腹:にごい赤褐色(Hue10YR8/5)、部分的にぼけちている 内腹:米白色(Hue2.5YR7/1)、口縁部 黑色、脚部 黑色	円筒形?
14 古式土師器 合併甕	口縁部付 高身 脚部付 脚部最大径	14.8 22 2.8 15.2	外腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:窓縫付窓縫ハケ 脚部から底部へ不規則な窓縫付窓縫ハケ	砂粒 内腹:にごい赤褐色(Hue10YR7/3)、全体の1/4程度の黒度 内腹:にごい赤褐色(Hue10YR8/4)	脚部は下1cm程度赤化。赤色 斑?
15 古式土師器 高身	口縁部付 高身 台輪部付	21.6 18.5 11.4	外腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒、金雲母 外腹:口縁部:ナメ(Hue10YR8/4)、やや赤みがかった部分あり、耳 部に黒斑 内腹:口縁部 灰褐色(Hue10YR8/3) 台輪部 金雲母(Hue7.5YR7/6)	風化
16 古式土師器 高身 在地未?	口縁部付 高身 台輪部付	19.9 12.7 11.5	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒、金雲母 外腹:口縁部:ナメ(Hue10YR8/3)、脚部中央から下半部は黒度-そ れぞれに付いた色の差し込み 内腹:米白色(Hue10YR8/6)、そばかす状の灰褐色染み	丹焼?
17 古式土師器 布質深甕	口縁部付 高身 脚部最大径	16.9 20.5 19.8	外腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒(石英粒が多い)、角閃石 脚部:火候工具(Hue10YR8/2)、脚部中央から下半部は黒度-そ れぞれに付いた色の差し込み 内腹:米白色(Hue10YR8/2)	丹焼?
18 古式土師器 布質深甕	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	17.8 24.5 21.9	外腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部から底部下:窓縫付窓縫ハケ	砂粒、角閃石 外腹:口縁部:ナメ(Hue10YR8/3)、脚部中央から下半部は黒度-そ れぞれに付いた色の差し込み 内腹:米白色(Hue10YR8/2)	脚部土質混入
19 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	13.5 32 36	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒、金雲母、角閃石 焼成されている 浅青褐色(Hue10YR8/3)、外腹の肩部から底部にかけて手の ひら大的黒斑、内腹に横5cm程の黒斑	外腹の黒度は2次の被熱による
20 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	19.5 15.8	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	角閃石、石英、紫粉料、灰白色子、白色粒子、米色粒子 外腹:米白色(Hue7.5YR7/6) 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	
21 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	35 21.3 27	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ	角閃石、石英、紫粉料、灰白色子、白色粒子、米色粒子 外腹:米白色(Hue7.5YR7/6) 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	
22 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	13.5 32 36	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒、金雲母、角閃石 焼成されている 浅青褐色(Hue10YR8/3)、外腹の肩部から底部にかけて手の ひら大的黒斑、内腹に横5cm程の黒斑	外腹の黒度は2次の被熱による
23 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	17.8 19.5 15.8	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	砂粒、金雲母、角閃石 焼成されている 浅青褐色(Hue10YR8/3)、外腹の肩部から底部にかけて手の ひら大的黒斑、内腹に横5cm程の黒斑	外腹の黒度は2次の被熱による
24 古式土師器 在地系?	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	13.7 8	外腹 口縁部:ナメ 内腹:下部から底部:目のかいハケ	砂粒、角閃石、金雲母 浅青褐色(Hue10YR8/4) 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	使用による摩滅で底部表面が稍 風化
25 二重口縁付 布質深甕	口縁部付 高身	21 8.2	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:ナメ	砂粒、角閃石、白い粒子 内腹:米白色(Hue10YR8/4)	表面に黑色の付着物 金像物に風化
26 13 14	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	17.6 19.5 22.6	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱	角閃石、石英、白色粒子 にごい青褐色(Hue10YR8/4)	
27 15	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	16.4 36 20	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	金雲母、黄雲母、白色粒子 焼成されている 浅青褐色(Hue10YR8/2) 内腹:米白色(Hue2.5YR7/2)	
28 16 17	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	15.6 12.2 16.4 16.5 0.4	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	金雲母、石英、赤色小颗粒 焼成されている 外腹:米白色 内腹:米白色	
29 18	口縁部付 布質系小形丸底甕 (復元)	18.9 9.8 12.2 13.8 14	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:下部:窓縫付窓縫ハケ 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	白色 外腹:角閃石 内腹:米白色 内腹:米白色	
30 19	口縁部付 布質系布合口甕	13.9 16.3 7.2 11.8	外腹 口縁部:ナメ 内腹:下部:火候工具による丁寧な取扱 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	角閃石、石英、小颗粒(白色) 焼成されている 外腹:白褐色、黒斑 内腹:米白色	
31 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	口縁部付 高身 脚部最大径 (復元径)	16.9 5.7 6.75 1	外腹 口縁部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:火候工具による丁寧な取扱 脚部:火候工具による丁寧な取扱 内腹:米白色(Hue10YR8/6)	砂粒 粗粒:米白色 内腹:にごい緑褐色	丹焼?

【参考文献】

- 古門雅高 1997 「稗田原遺跡住居跡出土の古式土師器について」『稗田原遺跡Ⅰ』（村川逸朗編） 長崎県文化財調査報告書 第136集 長崎県教育委員会
- 古門雅高 1999 「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
- 大野安生・松川憲毅・松尾尚哉 2003 「黒丸遺跡ほか発掘調査概報」Vol. 3 大村市文化財調査報告書 第25集 長崎県大村市教育委員会
- 竹中哲朗 2003 「第8章第3節 烏原半島の古墳時代住居跡出土土師器」「石原遺跡・矢房遺跡」（辻田直人・竹中哲朗編）国見町文化財調査報告書（概報） 第3集 長崎県国見町教育委員会
- 竹中哲朗・織田健吾 2006 「龍王遺跡（倉地川古墳）」雲仙市文化財調査報告書 第1集 長崎県雲仙市教育委員会
- 辻田直人・小野綾夏 2008 「龍王遺跡Ⅲ」雲仙市文化財調査報告書 第3集 長崎県雲仙市教育委員会
- 山本忠尚 2001 和英对照日本考古学用語辞典 東京美術



大型竪坑の実測前にしばし協議中（図版3の2段目）(1997/6/20)

# 図 版





77区～81区竪穴住居（柱穴）



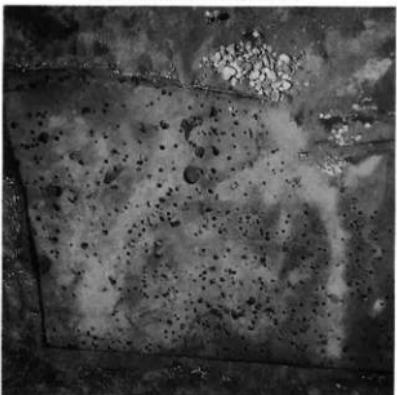
77区～81区竪穴住居（柱穴）拡大



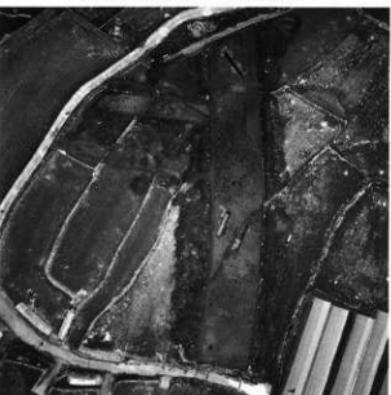
72区～76区竪穴住居（柱穴群）



72区～76区竪穴住居（柱穴）拡大



40区～68区古代掘立柱建物群



1区～5区中世大溝

図版 2



大型竪穴住居発掘風景



大型竪穴住居検出状況



77区～81区弥生竪穴住居検出状況（人は柱の位置）



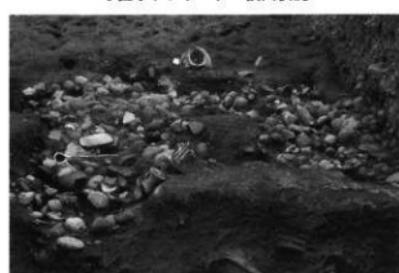
8区ウッドサークル検出状況



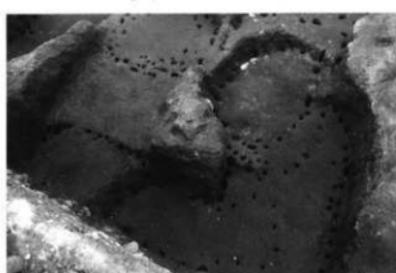
8区ウッドサークル検出状況



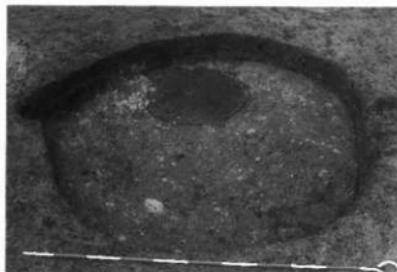
8区ウッドサークル杭痕



34区ウッドサークル内遺物検出状況



34区ウッドサークル検出状況



図版 4



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	つくだいせき							
書名	佃遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	雲仙市文化財調査報告書（概報）							
シリーズ番号	第4集							
編著書名	辻田直人							
編集機関	雲仙市教育委員会							
所在地	〒854-0492 長崎県雲仙市千々石町戊582番地				Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112			
発行年月日	西暦：2008年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
佃遺跡	長崎県雲仙市国見町神代東里	42362	86-54	32° 52' 8"	130° 16' 58"	19960205 / 19981101	15,000m <sup>2</sup>	圃場整備
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
佃遺跡	遺物包含地 集落跡	弥生～古墳時代 古代・中世	環濠集落・墓域 掘立柱建物 堀	弥生土器・古式土師器 古代土師器・須恵器 輸入陶磁器				環濠集落
要約	佃遺跡からは旧石器時代～近世までの多種・多様な遺構・遺物が検出されている。旧石器時代や縄文時代早期の遺物は他時期の遺物と混在する形で検出されており、今回の調査区以外の部分に包含層が残されている可能性がある。縄文時代晩期では埋カメが1基検出されている。弥生時代の遺構検出面の直下に検出されており、弥生時代以降の遺跡に削平されている部分も多くあるであろうが、近隣に良好な晩期遺跡が存在することは間違いないであろう。弥生時代～古墳時代初頭にかけては多くの遺物・遺構が検出されている。弥生時代では中期後半～後期前半にかけての環濠集落が検出されている。二重に巡る環濠や径10mを超える大型の堅穴住居が検出されている。また、壇棺墓群も検出されており、弥生時代の集落構造を考える上で貴重な資料となる。古墳時代初頭でも住居跡や廐棄土坑から古式土師器の一括資料が検出されており、当該期の土器編年に大きく寄与するものと考えられる。そのほかにも、9世紀～10世紀頃と考えられる掘立柱建物群や中世の大型の堀（幅5m、深さ2.5m）、龍泉窯系青磁碗の完形品など数多くの発見がなされており、佃遺跡は各時代において地域の中心的役割を果たしていたと考えられる。							

## Abstract

Book title	Tsukuda Site							
Subtitle								
Volume name	Report of an investigation Unzen-City cultural properties							
Volume	Vol 4							
Editors	Naoto Tsujita							
Editorial organization	Unzen-City Board of Education, Nagasaki-Preecture, Japan							
Address	Bo-582, Chijiwa-cho, Unzen-City, Nagasaki-Preecture, 854-0492, Japan							Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112
Date of issue	31 th March 2008							
Site name	Location	City code	Site number	North latitude ° ′ ″	East longitude ° ′ ″	Investigated term	Investigated area (m <sup>2</sup> )	Cause of investigation
Tsukuda Site	Higashisato Koujiro, kunimi-cho Unzen-City, Nagasaki- Prefecture, Japan	42362	86-54	32° 52' 8"	130° 16' 58"	05-Feb-96 1 01-Nov-98	15,000	Field maintenance project
Site name	Site kind	Period	Main features	Main artifacts			Remarks	
Tsukuda Site	Village mark Relic inclusion ground	Tumulus period from Yayoi Era Ancient The Middle Ages	Moated circular settlement · Grave yard · Embedded-pillar building · Moat	Yayoi ware · Ancient haji ware · Import celadon porcelain	Ancient haji ware · Sue ware	Import celadon porcelain	Moated circular settlement	

雲仙市文化財調査報告書(概報) 第4集

## 佃 遺 跡

2008

発行 雲仙市教育委員会  
長崎県雲仙市千々石町戊582番地  
TEL 0957-37-3113

印刷 合資会社 やまさ印刷所  
雲仙市国見町多比良乙210  
TEL 0957-78-2002

